

## GHS分類比較表

DOA (DEHA) アジピン酸ビス(2-エチルヘキシル)

### 物理化学的危険性

注) 可塑剤工業会 分類根拠欄 - は、NITEと同じ

危険 有害性項目	NITE		可塑剤工業会	
	分類結果	分類根拠	分類結果	分類根拠
1 火薬類	分類対象外	爆発性に関する原子団を含まない。	分類対象外	—
2 可燃性 引火性ガス	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
3 可燃性 引火性エアゾール	分類対象外	エアゾール製品でない。	分類対象外	—
4 支燃性 酸化性ガス	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
5 高圧ガス	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
6 引火性液体	区分外	ICSC(2002)による引火点は157°C(密閉式)であり、区分外」に該当する。	区分外	—
7 可燃性固体	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
8 自己反応性化学品	分類対象外	爆発性、あるいは自己反応性に関する原子団を含まない。	分類対象外	—
9 自然発火性液体	区分外	常温の空気と接触しても自然発火しない(発火点402°C(ICSC,2002))。	区分外	—
10 自然発火性固体	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
11 自己発熱性化学品	分類できない	液体状の物質に適した試験方法が確立していない。	分類できない	—
12 水反応可燃性化学品	分類対象外	金属または半金属 (B, Si, P, Ge, As, Se, Sn, Sb, Te, Bi, Po, At) を含まない。	分類対象外	—
13 酸化性液体	分類対象外	フッ素および塩素を含まず、酸素を含む有機化合物であるが、この酸素が炭素、水素以外の元素と化学結合していない。	分類対象外	—
14 酸化性固体	分類対象外	GHSの定義における液体である。	分類対象外	—
15 有機過酸化物	分類対象外	-O-O- 構造を含まない有機化合物である。	分類対象外	—
16 金属腐食性物質	分類できない	データなし。	分類できない	—

### 健康に対する有害性

危険 有害性項目	NITE		可塑剤工業会	
	分類結果	分類根拠	分類結果	分類根拠
1 急性毒性 経口)	区分外	ラットを用いた経口投与試験LD50 9,100 mg/kg (環境省リスク評価第2巻 (2003)、25,000 mg/kg (IARC 77 (2000))のうち低い値LD50=9,100 mg/kgから区分外とした。	区分外	—
1 急性毒性 経皮)	区分外	ウサギを用いた経皮投与試験のLD50 14,752 mg/kg (環境省リスク評価第2巻 (2003)) から区分外とした。	区分外	—
1 急性毒性 吸入 (気体)	分類対象外	GHSの定義による液体のため、ガスでの吸入は想定されず、分類対象外とした。	分類対象外	—
1 急性毒性 吸入 (蒸気)	分類できない	データなし	分類できない	—
1 急性毒性 吸入 (粉塵、ミスト)	分類できない	データなし	粉塵 分類対象外 ミスト 分類できない	液体であるため、粉塵については分類対象外とした。
2 皮膚腐食性 刺激性	区分3	CERIハザードデータ集97-12 (1998) のウサギを用いた皮膚一次刺激性試験結果、わずかな紅斑と72時間後の消失」から、区分3であり、環境省リスク評価第2巻 (2003) では 動物試験で、皮膚に刺激性なし」で区分対象外であるが、安全サイドから区分3とした。	区分外	CERIハザードデータ集97-12 (1998) のウサギを用いた皮膚一次刺激性試験結果 わずかな紅斑と72時間後の消失」とあるが、平均スコアが低いと考えられ、環境省リスク評価第2巻 (2003) では、動物試験で皮膚に刺激性なし」とあり、区分外とした。
3 眼に対する重篤な損傷 眼刺激性	分類できない	環境省リスク評価第2巻 (2003)本文にて、動物実験では眼や皮膚への刺激性はない。」という記述があるが、区分外とするにはデータ不足のため、分類できないとした。	分類できない	—
4 呼吸器感受性と皮膚感受性	呼吸器感受性： 分類できない	呼吸器感受性：データなし 皮膚感受性： CERIハザードデータ集 97-12 (1998)、環境省リスク評価第2巻 (2003) のモルモットを用いた皮膚感受性試験結果結果では、皮膚感受性が認められなかったが試験数が少なく詳細条件不明であり、また疫学結果も無いため、分類できないとした。	呼吸器感受性： 分類できない	—

		皮膚感受性 分類できない	ICL/CTL	皮膚感受性 分類できない	
5	生殖細胞変異原性	区分外	IARC 29 (1982)、IARC 77 (2000)の記述から、生殖細胞in vivo経世代試験(優性致死試験)で弱い陽性であるが、9,220 mg/kgという現在のガイドラインの限界用量を超える用量で、且つ腹腔内投与による結果であり、仮に弱い反応性があるとしても、生物学的意義は無視しうる程度のものであると考えられることから陰性と判断、生殖細胞in vivo変異原性試験なし、体細胞in vivo変異原性試験で陰性であることから区分外とした。	区分外	—
6	発がん性	区分外	IARC 77 (2000)で3、EPA (1994)でCに分類されていることから区分外とした。	区分外	—
7	生殖毒性	区分2	環境省リスク評価第2巻 (2003)、IARC 77 (2000)の記述から、ラットの一世代試験で親動物に影響のある用量で胎子の体重及び体長の低下がみられ、また、ラットの催奇形性試験では胎子に用量に依存した尿管奇形(拡張、ねじれ)がみられているが、親動物での一般毒性の記載が無いので区分2とした。	区分外	SIAM等で採用されている、ICI/CTLの報告書 (1988b)では28mg/kg 飼中に300ppm)をNOELとしているが、170mg/kg 飼中に1800ppm)で見られた変化は異常(anomaly)ではなく、化骨遅延、尿管の拡張、尿管のねじれであり、いずれも軽度で出産後正常になる性質の変異(variant)であり、通常これは発生毒性と考えなく、US EPAは170mg/kg 飼中に1800ppm)をNOELと判断し、OECDのSIAM(2000)でもこれを採用している。また、同研究所で行われた同投与量による繁殖性試験 (1988a)でも170mg/kgで影響が認められていない。有害性評価書においても、発生毒性のNOAELは170mg/kgと判断されている。以上により、区分外とした。
8	特定標的臓器 全身毒性 単回暴露	分類できない	データなし	分類できない	—
9	特定標的臓器 全身毒性 反復暴露	分類できない	データ不足のため、分類できない	分類できない	—
10	吸引性呼吸器有害性	分類できない	データなし	分類できない	—

### 環境に対する有害性

危険・有害性項目	分類結果	NTE		可塑剤工業会	
		分類結果	分類根拠	分類結果	分類根拠
11 水生環境急性有害性	区分外	区分外	水溶解度 (0.0032mg/L (SIDS, 2002))までの濃度で急性毒性が報告されていないことから、区分外とした。	区分外	—
11 水生環境慢性有害性	区分外	区分外	急速分解性があり(BODによる分解度:71% 既存化学物質安全性点検データ)、かつ生物蓄積性が低い(BCF=27 CERL/NITE有害性評価書 暫定版、2006)ことから、区分外とした。	区分外	—